

教えて！！漢方&鍼灸「漢方薬は感染症なしでは語れません Vol.1」

附属東洋医学研究所
助教 田中香代子

教えて！！漢方&鍼灸



漢方薬は感染症なしでは語れません Vol.1

以前、大谷かほり先生が担当された「漢方とコロナ」(2020年7月号)でも紹介がありましたが、今回は「漢方薬は感染症なしでは語れません」というタイトルでお伝えしたいと思います。

中国の後漢の時代の医学書に、漢方のバイブルともいえる『傷寒論』があります。

「傷寒」とは、腸チフスやインフルエンザなど流行病の総称です。「傷寒」まではいかない、今で言うところの上気道炎やかぜ症候群は「中風」と呼ばれていました。



『傷寒論』は張仲景という方が著したとされています。ここでは、張仲景がこの書物を著した背景をご紹介します。

時は後漢の末期、著者である張仲景は長沙(現 湖南省)の太守(知事)をしていました。張仲景には200人を超える親族がいましたが、10年経たないうちに3分の2が亡くなってしまいました。このうち、7割が「傷寒」で亡くなったことに心を痛めて、『傷寒雑病論』という医学書を著しました。

『傷寒雑病論』は宋の時代に『傷寒論』(「傷寒」(急性熱性病)に関する治療法)と『金匱要略』(慢性疾患に対する治療法)という2つの書物に分けられました。

さて、『傷寒論』にはどのようなことが書いてあるのでしょうか？

皆さんも一度は風邪をひかれたことがあるかと思います。

最初寒気がきて、熱が出て、喉が痛くなったり頭痛がしたり、その後咳が出てきて・・・と症状が日ごとに変わっていったのではないかと思います。

この『傷寒論』には急性疾患に罹り、日ごとに変わっていく症状をきちんと把握して、経過を時期によって6つに分け、6つに分けた時期とその症状に合わせた治療法を記載しています。有名な漢方では、「葛根湯」や「麻黄湯」などがありますが、これらはいずれも「傷寒」の初期である「太陽病期」と呼ばれる時期に使われる薬で、症状や体の強さに応じてどの処方にするかが細かく記載されています。

例えば、同じ「傷寒」で「太陽病期」であっても、汗をかいているか否かで、使う漢方が違います。特にかぜ症候群の初めに用いる漢方薬は、体の強さと病気の勢い、症状、脈などをみて選び、病気に対する体の反応を高めてくれるものなので、インフルエンザ、季節性の風邪(多くはウイルス感染)、新型コロナウイルス感染症であっても、原因となるウイルス・細菌関係なく使用します。

また、『傷寒論』には、経過に合わせた治療法だけでなく、誤って治療してしまった際の副作用に対する治療法も書いてあり、治療家にとってはとても手厚く細かく対応が論じられています。

後漢の時代に「傷寒」の流行がなければ、漢方薬がこれだけ系統だてて作られることがなかったかと思うと「漢方薬は感染症なしでは語れません」。

次回は「漢方薬は感染症なしでは語れません Vol.2」です。

